

# 日本に来てからのこと

六年 セバステイアン

ぼくは一年の二学期にペルーから日本の石川県に来ました。知っていた日本語は「わからない」だけでした。ほかの言葉は、ぜんぜんわからないので、ストレスがたまりました。何を言われているのかがわからないし、言いたいことも言えなくていらいました。スペイン語で言っても、わらわれたのです。だから、友だちにいすや本とかいろいろなげました。また、パンチやキックとかいろいろしました。

今思うとばかだったなあと思います。でも、そのときのぼく<sup>(1)</sup>の心はまっくらでつらかったです。日本に来たくなかったです。ペルーに帰りたいなと思いました。

二・三年生のとき、だんだんことばがわかるようになりました。みんなとおしゃべりができて、うれしいけれど、まだ完全にことばがわからないので、言えないことがいっぱいありました。それで、何でもほかの子が決めてしまったり、気持ちが伝えられなかったりしました。何でも、じっくり考え

るひまもありませんでした。そして、三年の三学期のとき、同じクラスの男子とよくけんかを始めました。

四年になりました。四年のときもその子とけんかがはげしく続いていたのです。今思えばけんかしたことでもわかることがふえたけど、その時はけんかばかりはいやだなと思っていました。そして、みんなぼくをさけているように思いました。だれも、ぼくの気持ちをわかってくれないと思いました。四年生ぐらいから、ぼくの未来はどうなるのだろうと考えるようになったました。

五年生のときは、けんかがへりました。ことばがわかるようになって、気持ちも言えたし、みんなの気持ちもわかるようになったからです。

でも、ぼくは、女の友だちをけがさせました。気持ちを上手に伝えられなくて、しかも相手にけがまでさせて、なんてひどいことをしてしまったのかなあと思います。実は、ぼくはそのとき転校しそうになっていました。父さんと母さんの仕事がなくって、住んでいたアパートもいられなくなったからです。ぼくは、それを母さんから聞いてどきどきしました

た。その日から住むところと仕事をさがしていました。ぼくは、生きていくのってこんなことなのかなあと思いました。転校したくなかったです。一年生から、すごしていたみんなといっしょにいたかったです。ある人に「ペルーに帰れ」と言われましたが、スペイン語は書けないし、ペルーに帰りたいくなかったからです。でも、けがをさせてしまったことは、本当に悪かったと今はすごく反省しています。

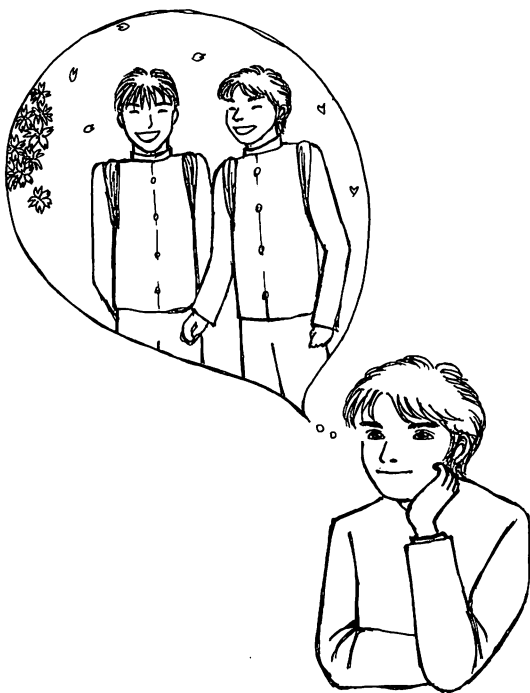
しばらくして、住むところが見つかりました。先生はアパートをさがしてくれ、引こしを手伝ってくれました。クラスで、ぼくのつらい気持ちを話してわかってもらう時間がありました。ぼくは、話してよかったと思いました。すつきりしたし、まわりの友だちがわかってくれたからです。六年生になって思っていることは、けんかがへったし、やらなければいけないこともやっているし、あんまり考えることはなくなりました。けれど、家が遠くなってしまって、よく遊んだ人もへってしまいました。ちよびつとさびしいです。相手に「自分の家で遊ぼう。」と言ったら、「遠いしだめ。」とか言うからです。一人だけよく家に来ています。とってもその人に感謝

しています。そういうなやみが出てきています。

ぼくは、今日本にきて思っていることは、ずいぶん友だちもつくったし、日本語もバッチグーだし、まあ、来てよかったなあと思っています。

<sup>(3)</sup> 中学に向けて思っていることは、中学校へみんなと行きたいということ。友だちといっしょにがんばって勉強したり、遊んだり、なかよくしたいです。

みんなには、今までいろいろめいわくをかけてごめんといいたいし、そして、ありがとうと言いたい。なかよくいっしょにすごしたいです。



## 日本に来てからのこと（小学校中・高学年）

### A 教材設定の理由

障害のある子、言葉に壁のあるニューカマーの子、自分を表現するのが苦手な子など、様々な理由で自分の思いをなかなか伝えられない子は少なからず学級にいる。そうした子どもたちは、思っていることが相手に伝えられない、自分を分かってもらえないというしんどさから、荒れた行動に出てしまったり、逆に自分の殻にとじこもったりすることがある。

そんなとき、周りの子どもたちはどんな行動をとるだろうか。「変わった子」「乱暴な子」「暗い子」という見方で、そんな子を排除していいだろうか。それがさらに彼らを追いつめ、つらくさせていく。

差別されていた子が学級で自分の生活を語り出すのは自分の思いを受け止めてくれる教師や仲間がいると感じたときである。そのときがその子と周りの子をつなぐ大きなチャンスである。しかし、周りの子に共感と支援だけを求めては、単なる同情に終わってしまう。周りの子がしんどさに共感しながらその背景に思いをめぐらし、実はその子を追いつめていたのは自分たち一人ひとりだったんだと気づき、周りの子も自分あり様を振り返ったとき、ほんとうのつながりが生まれる。

この教材を通して、学級の一人ひとりの子どもたちが、自分の学級のあり様と重ねながら、自分たちの姿を振り返らせる機会としたい。

### B 教材の解説

この作文は言葉の壁、生活のしんどさ、周りからの差別に苦しむ日系ペルー人のセバステイアンを学級の中に位置づけようとするとりくみの一つから生まれた。

日系ペルー人のセバステイアンは、自分の思いを伝えられないiraだちを暴力で表わした。それに対して周りの子はセバステイアンを遠ざけ、「ペルーに帰れ」など差別的な言葉をはく子も出てきた。

五年生の時、担任は、セバステイアンのつらさをみんなに知ってもらおうと「外国人労働者を取り巻く状況」についてセバステイアンと重ねて考える授業を行ったり、セバステイアンがつらさを語ったり、学級の子がセバステイアンとのつき合いを振り返ったりする場面を持つたりした。周りの子どもたちの中にはセバステイアンのつらさに共感し、支える行動をとる子も出てきた。

六年生になって七月から九月、担任は、放課後を使ってセバステイアンが自分自身の生い立ちを見つめ直し、それを作文に書くとりくみを行った。

その作文には「ぼくの心はまっくらでつらかったです。」「ぼくの未来はどうなるのだろうかと考えようになりました。」「生きていくのってこんなことなのかなあと思いました。」としんどさとその中を生きていく姿が自分の言葉で素直に綴られていた。担任はここまで考えていたのかとその言葉の重みに深い共感を覚え、本当の意味でセバステイアンの側に立てるようになったと語っている。セバステイアンが素直に自分を語れ

たのは担任の存在とともに、学級の中に自分の思いを受け止めてくれる子が出てきて、友だちを信頼できるようになったからであろう。

セバステイアンの作文には、周りの子のあり様を問う言葉もある。「スペイン語で言ってもわらわれたのです」「何でもほかの子が決めてしまったり、気持ちが悪えられなかったりしました。じつくり考えるひまもありませんでした。」「みんなぼくをさけているように思いました。だれもぼくの気持ちをわかってくれないと思いました。」「ある人に『ペルーに帰れ』と言われましたが、スペイン語は、書けないし、ペルーに帰りたくなかったからです。』などの文に周りの子から排除されているつらさが表われている。

特に「ペルーに帰れ。」という言葉が、どれだけ差別的な言葉かと言うことをまず指導者が十分に受け止め子どもたちに返してほしい。南米にはブラジル、ペルーを初め多くの移民が国策として送られた。しかし、政府は彼らの生活を保障する十分な手立てをとることなく、生活苦にあえいだ人も少なくない。この政策を「移民」ではなく「棄民」と言う人もいるくらいである。そうして生活できなくなった南米出身の日系外国人は職を求めて日本にやって来て、日本の最底辺の労働を担っているのである。そうした人たちや家族に「ペルーへ帰れ。」と言う言葉の重みを今一度考えてほしい。

これらの言葉を手掛りに、セバステイアンの思いを探り、周りの子のあり様を考えていくことは、自分の思いを伝えられない子のつらさに思いを巡らし、自分のあり様を問うことのきっかけとなるであろう。

セバステイアンは作文の最後に、「みんなと中学へ行きたい」と書いて

いる。けんかばかりしていたセバステイアンが、なぜ中学校へみんなと行きたいと思うようになったのだろうか。それは、友だちの中に、これまでの自分とのつき合いを振り返り、自分の思いをしっかりと受け止めてくれる仲間がいると実感できたからであろう。すなわち、学級の中に居場所ができたのである。

### C 教材の使用にあたって

セバステイアンが落ち着いてきたのは、セバステイアンが単に日本語を分かるようになり、自分の思いを伝えられるようになったというふうに捉えてほしくない。担任は在日外国人労働者の置かれている状況の学習、本名を名乗りたくましく生きている在日朝鮮人との出会い、ペルーの生活・文化の学習等、民族的アイデンティティをめぐるとりくみを精力的に実践している。セバステイアンは日本人に同化したのではなく、ペルー人のセバステイアンとして学級に居場所ができたのだということをしつかりとおさえてほしい。

### D 参考資料

第五五回全国人権・同和教育研究大会報告

「Sとつながりあいたい（足元からの国際化）」

北川 茂（能美市立粟生小学校）

E 授業の展開例

授業の展開と基本発問	学習内容と支援
<p>1 導入</p> <p>① 今までに、自分の気持ちを上手に伝えられなくて、いらいらしたことはありませんか。</p> <p>2 展開</p> <p>② 教材文を読む。</p> <p>③ 「(1)ぼくの心はまっくらでつらかったです。」(2)ぼくの未来はどうなるのだろうかと考えるようになりました。」から、どうしてこんなふうになったのか、それぞれ考えてみましょう。</p> <p>④ そんなセバステイアンに周りの子はどんな態度をとっていたのでしょうか。</p> <p>⑤ 「ペルーに帰れ」と言われたセバステイアンの気持ちを考えましょう。</p> <p>⑥ 「(3)中学に向けて思っていることは、中学校へみんなと行きたいということですよ。」と、友だちとけんかばかりしていたセバステイアンが、中学へみんなと行きたいと思うようになったのはなぜですか。</p> <p>3 まとめ</p> <p>⑦ セバステイアンにとったような態度を今まで友だちにとったことはありませんか。</p>	<p>① 発表しにくい場合は指導者の体験談を具体的に語るのもよい。教材の内容に関わらず、自由に発言させて、雰囲気や和らげたい。</p> <p>② 教職員の範読の後に指名読みさせる。気持ちを込めて丁寧に読みたい。</p> <p>③ それぞれの言葉の背景にあるセバステイアンのつらさに共感させたい。それぞれの文を板書し、子どもたちの発言を整理し、セバステイアンの思いの背景に迫りたい。</p> <p>④ 実は周りの子がセバステイアンを追いつめてつらくさせていたことに気付かせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スペイン語で話したのを笑った。</li> <li>・よくけんかをした。</li> <li>・「ペルーに帰れ」と言う子がいた。</li> <li>・さけられた。</li> </ul> <p>⑤ セバステイアンの本当のつらさは、自分の思いを分かってもらえないだけでなく、逆に周りの子から差別されたことだと分かる。「ペルーに帰れ」という言葉がいかに差別的な言葉か、学年に応じて教材の解説を使って補足する。</p> <p>⑥ 周りの子とつながり、学級に居場所ができて、いるのが当たり前になった。日本人に同化したのではなく、ペルー人として認められるとくみがあったことを補足する。</p> <p>⑦ これまでの友だちとのつき合いを振り返り、つらい思いをしている子の思いとつなげていきたい。</p>